

# 否定的評価の過大推測に対する特性自尊心の調整効果： 場面想定法を用いた検討<sup>1)</sup>

藤島 喜嗣

## Effect of Trait Self-Esteem on Overestimating Others' Negative Evaluation: A hypothetical scenario experiment.

Yoshitsugu FUJISHIMA

Previous studies have shown that people committing social blunders anticipate being judged more harshly by others than they actually are. Because self-esteem reflects the feeling that the person expects to be accepted by others, it was hypothesized that the overestimation bias would be moderated by individual differences in trait self-esteem. Female undergraduates ( $n=118$ ) considered two hypothetical scenarios. In the actor condition, participants were asked to imagine that they had committed a social blunder and anticipate how negatively observers would judge them. In the observer and the third person conditions, participants imagined watching someone else commit a blunder. Participants in the observer condition judged those actors. Participants in the third person condition anticipated how negatively observers would judge those actors. Results indicated that participants in the actor condition anticipated that they would be evaluated more negatively compared to the judgments by participants in the observer and the third person conditions. In the actor condition, people with low self-esteem overestimated others' negative evaluation compared to those with high self-esteem. The implication of these findings for social interactions and the limitation of the present study are discussed.

*Key words* : *overestimation of others' negative evaluation* (否定的評価の過大推測),  
*trait self-esteem* (特性自尊心), *sociometer theory* (ソシオメータ理論)

### 問 題

#### 否定的評価の過大推測

レストランで一人で食事したり、映画館で携帯電話を鳴らすなど、自分を場違いだと感じ、恥ずかしく感じる事が日常生活ではよくあるだろう。その一方で、他の誰かがそのような行為を行った場面を考えてみると、必ずしもその人物を否定的に評価せず、“何か理由があるのかもしれない”と好意的に考えるかもしれない。Savitsky, Epley, & Gilovich (2001) によると、私たちに、自分がしてしまった失態について、周囲の人からの否定的な評価を実際よりも過大に推測する

傾向がある。これを否定的評価の過大推測という。

Savitsky et al. (2001, Study 1) は、場面想定法を用い、否定的評価の過大推測の存在を示している。彼らは、大学生の実験参加者に、図書館の警報装置を鳴らしてしまう、パーティの招待に手ぶらで参加する、激安スーパーの袋を下げ、買い物していたところを見られる、といった場면을次の3つのいずれかの立場で想像させ、評定を求めた。行為者条件では、自分がこれらの行為をしてしまったと想像し、周囲の他者からどのように評価されると思うかを推測した。観察者条件では、自分以外の他の誰かがこれらの行為をしたと想像し、自分はこの人物をどう思うか評定した。

第三者条件では、自分以外の他の誰かがこれらの行為をしたと想像し、その周囲の人はその行為をした人をどう思うだろうか評定した。その結果、いずれの場面においても、行為者条件の参加者による否定的評価の推測は、観察者条件ならびに第三者条件の参加者の評定を上回っていた。つまり、行為者は、自らの失態への評価を実際よりも否定的に推測したのである。

本研究の第一の目的は、Savitsky et al. (2001, Study 1) を、想定させる場面を変えて追試することである。失態したと想像する人（行為者）は、その行為を目撃したと想像する人（観察者）や第三者がどう評価するか推測する人（第三者）よりも、行為に対する評価の否定性を高く見積もるだろうと予測できる。

### 過大推測の生起プロセス

行為者における否定的評価の過大推測は、特定のことに注目し、他の可能性を過小評価する傾向である焦点化の錯覚 (focusing illusion) で説明されている (Gilbert & Wilson, 2000; Savitsky et al., 2001)。

Savitsky et al. (2001, Study 3) では、行為者が観察者からの評価を推測する前に、他の参加者の判断に影響しそうな要因を列挙する脱焦点化を求めた。その結果、脱焦点化をした行為者は、脱焦点化をしなかった行為者と比較して、観察者から好意的に評価されると推測していた。さらに、この脱焦点化操作をうけているときに、実際に他の要因について考えることができた行為者は、そうでなかった行為者と比べて、観察者から好意的に判断されるだろうと推測する傾向にあった。

また、Savitsky et al. (2001, Study 4) では、自分を紹介する文章における特定の否定的出来事以外の出来事数を操作し、紹介された人物本人による他者評価推測と実際に紹介文を見た観察者の評価とを比較した。その結果、観察者の実際の評価は、否定的出来事以外の情報が少ない場合よりも多い場合の方が肯定的になった。その一方、紹介された人物本人の推測は、否定的出来事以外の情報の多い少ないに関わらず、否定的なままだったのである。

これらの結果は、否定的行為後に他者評価を推測する際、その特定の否定的行為のみに焦点化して評価推測し、他の要因を考慮できなかった可能

性を示している。つまり、焦点化の錯覚が否定的評価の過大推測の根底にあると考えられるのである。

### 特性自尊心による調整効果

本研究の第二の目的は、この否定的評価の過大推測に対する特性自尊心の調整効果を検討することである。特性自尊心の高さは、否定的評価の過大推測を弱めるかもしれない。

第一に、特性自尊心が他者からの受容に関する情報として働く可能性がある。ソシオメータ理論 (Leary & Baumeister, 2000) によると、自尊心は、他者から受容されているという知覚をしめすシステムとして働いているという。つまり、このシステムは対人的環境をモニターし、他者からの受容の脅威となるものが存在しないか常に監視しているのである。そして、脅威となるものが検出された場合には、否定的感情を引き起こし、対人関係に注意を向けるように自分を動機づける。このとき生じている感情が状態自尊感情とされる。Leary, Tambor, Terdal, & Downs (1995) では、自分が集団から排除されると考えた実験参加者が状態自尊感情を低下させることを見いだしている。

これに対し、個人における恒常平均レベルを示すのが特性自尊心である。Leary et al. (1995) によると、高自尊心者は、自分が他者から受容される人物であり、自分と関係を持つことに他者が価値を置いていると考えやすい。その一方で、低自尊心者は、自分は受容されない人物で、他者は自分と関係を持つことに価値を置いていないと考えやすい。たとえば、Baldwin & Sinclair (1996) は、社会的な意味が曖昧な反応を拒絶として解釈しやすくする否定的自己スキーマを低自尊心者が備えていたことを見いだしている。

このことから考えると、高自尊心者は、社会的失態を犯した場面においても他者からの受容を予測しやすく、低自尊心者は他者からの受容を予測しづらくなると考えられる。まず、高い特性自尊心それ自体が他者からの受容度を示す情報として機能し、評価の否定性を減じてしまう可能性がある。さらには、高い特性自尊心と関連づけられた肯定的な自己関連情報が活性化し、焦点化の錯覚を弱める他の要因として働くかもしれない。そして逆のことを低い特性自尊心がもたらすかもしれない。その結果、高自尊心者では、低自尊心者と

比べて、否定的評価の過大推測が弱まることが予測される。

第二に、感情改善に対する動機づけの問題がある。自尊心は、焦点化の錯覚に基づく他者評価推測の後、否定的行為のインパクトを緩衝し、否定的評価推測を修正させるかもしれない。Smith & Petty (1995)によると、高自尊心の人は否定的感情状態におかれたときにその感情状態を改善しようとする一方で、低自尊心の人は改善を試みない。このことは、高自尊心の人は、低自尊心の人と比べて、否定的行為から喚起された否定的感情を改善しようと動機づけられやすく、自分の行為を正当化する一方、他者が評価の基準として設ける他の要因に注目しやすくなる可能性を示唆している。その結果、高自尊心の人では、低自尊心の人と比べて、否定的評価の過大推測が弱まることが予測される。

### 本研究の目的

以上のことから、本研究は、事前に特性自尊心を測定しておいた上で、場面想定法を用いた質問紙実験を実施し、否定的評価の過大推測と自尊心の関連を検討することにした。仮説は次のようになる。失態をしたと想像する人（行為者）は、その行為を目撃したと想像する人（観察者）や第三者がどう評価するか推測する人（第三者）よりも、行為に対する評価の否定性を高く見積もるだろう（仮説1）。行為者における否定的評価の過大推測は、低自尊心者よりも高自尊心者で弱まるだろう（仮説2）。

## 方法

### 実験参加者

昭和女子大学で社会心理学の講義を受講する学生118名で、すべて女性であった（平均年齢19.76歳、 $SD=2.65$ ）。彼女たちは社会心理学の初歩的な知識を身につけていたが、本研究に関わるような内容の説明を受けたことはなかった。彼女たちを行為者条件（ $n=38$ ）、観察者条件（ $n=38$ ）、第三者条件（ $n=42$ ）のいずれかの条件へ無作為に割り当てた。また、手続きの約3ヶ月前に、授業時間を利用して Rosenberg 自尊心尺度に回答を求めた。このうち2名が回答の不備により分析から除外され、最終的には116名が分析対象となった。

### 手続き

授業時間を利用して質問紙実験を実施した。日常生活における場面刺激を二つ呈示し、自分がその場にいるかのように想定させた。いずれも否定的な意味合いを持つ行為に関するエピソードであった。一つ目の場面（場面1）は、映画を見に出かけた場面であり、感動的な映画の途中で携帯電話が鳴り響くというエピソードであった。二つ目の場面（場面2）は、ファーストフード店での場面であり、トレーのカップとお皿を落としてしまうというエピソードであった。上記のエピソードそれぞれを、行為者、観察者、第三者のいずれかの立場で場面想定させた。行為者条件では、否定的な行為を自ら起こしたとして場面想定した。観察者条件ならびに第三者条件では、否定的な行為を他の人物が起こしたとして場面想定した。各場面における各条件の教示を付録1に示す。

それぞれのエピソードを想定した上で、否定的行為に対する評価を“悪く思う”、“非難する”、“気にしない(逆転項目)”、“礼儀知らず(場面2では‘注意散漫’)だと思う”の各4項目に“そう思う”から“そう思わない”の7件法で尋ねた。行為者条件では“その場面で、あなたはどのような気持ちになるでしょうか?”と教示し、各質問項目を“周りの人は私のことを悪く思うだろう”、“周りの人は私を礼儀知らずだと思うだろう”、“周りの人はあとで私のことを非難するだろう”、“周りの人はあまり気にしないだろう”とした。このようにすることで、否定的行為を行った自分が周囲からどのような評価を受けるかを推測させた。

観察者条件では“その場面で、あなたはどのような気持ちになるでしょうか?”と教示し、各質問項目を“その人物のことを悪く思うだろう”、“その人物のことを礼儀知らずだと思うだろう”、“その人物のことを非難するだろう”、“その人物のことはあまり気にしないだろう”とした。このようにすることで、否定的な行為を行った他者に対し、自分はどのような評価をするかを尋ねた。

第三者条件では“その場面で、周囲の観客はどのような気持ちになるでしょうか?”と教示し、観察者条件と同じ質問項目に回答を求めた。このようにすることで、否定的な行為を行った他者に対し、自分以外の周囲の人がどのような評価をするか推測させた。

## 結 果

### 指標の作成

場面1では否定的評価の4項目は互いに高い相関関係を示した ( $|r|s>.29$ ,  $ps<.01$ ) ので合計した。場面2では“気にしない”という逆転項目が他の3項目と無相関であったが ( $|r|s<.11$ )、他の3項目間では高い相関関係を示した ( $|r|s>.56$ ,  $p<.01$ )。信頼性を損なう可能性があるが、場面2においても4項目を合計した。さらに、両場面の得点は正相関を示した ( $r=.29$ ,  $p<.01$ ) ので合計し、否定的評価の指標とした ( $M=40.09$ ,  $SD=6.48$ )。得点が高いほど評価が否定的であることを示す。

Rosenberg 自尊心尺度は高い信頼性を示した ( $\alpha=.83$ ) ので合計した ( $M=28.46$ ,  $SD=6.71$ )。さらに、平均値と各ケース得点との差を求め、中心化した ( $M=0.00$ ,  $SD=6.71$ )。得点が高いほど高自尊心であることを示す。次に、ダミー変数を2つ用意した (Aiken & West, 1991)。ひとつは行為者条件=0、観察者条件=1、第三者条件=0とし、行為者と観察者との比較の指標とした (以下、“観察者比較”と略記)。もう一つは、行為者条件=0、観察者条件=0、第三者条件=1とし、行為者と第三者比較との比較の指標とした (以下、“第三者比較”と略記)。さらに、中心化した自尊心と各ダミー変数の積を算出し、自尊心×観察者比較 ( $M=.04$ ,  $SD=3.84$ )、自尊心×第三者比較 ( $M=-.01$ ,  $SD=3.73$ ) の二つの交互作用項を作成した。

### 否定的評価に各視点と自尊心が及ぼす影響

否定的評価に各視点と自尊心が及ぼす影響を検討するために、否定的評価を基準変数、(中心化した) 自尊心、観察者比較、第三者比較、自尊心

×観察者比較、自尊心×第三者比較を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。第一ステップでは説明変数を自尊心、観察者比較、第三者比較とした。これは、場面想定における視点と自尊心の主効果の検討に相当した。第二ステップでは説明変数に自尊心×観察者比較、自尊心×第三者比較を追加した。これは交互作用効果を検討することに相当した。

第一ステップにおける  $R^2$  値は.22となり、モデルは有意となった ( $F(3, 112)=10.82$ ,  $p<.001$ )。各主効果に着目すると、自尊心の効果は有意ではなかった ( $\beta=-.04$ ,  $t<1$ ,  $ns$ )。一方、観察者比較 ( $\beta=-.41$ ,  $t=4.24$ ,  $p<.001$ )、第三者比較 ( $\beta=-.53$ ,  $t=5.44$ ,  $p<.001$ ) のそれぞれが有意となった。観察者の評価や第三者の評価よりも行為者の推測の方が否定的である傾向が示された。

次に第二ステップであるが、 $R^2$  値が.27となり、モデルは有意となった ( $F(5, 110)=8.24$ ,  $p<.001$ )。また、第一ステップから第二ステップにおける  $R^2$  値の変化量は.05となり、有意な変化が認められた ( $F(2, 110)=3.61$ ,  $p<.05$ )。このことから第二ステップにおけるモデルが妥当であると判断した。あらためて、各主効果に着目すると、自尊心の効果は有意となった ( $\beta=-.27$ ,  $t=2.03$ ,  $p<.05$ )。全般的にみて、自尊心が低いほど否定的評価が高まることが示された。一方、観察者比較 ( $\beta=-.42$ ,  $t=4.41$ ,  $p<.001$ )、第三者比較 ( $\beta=-.54$ ,  $t=5.64$ ,  $p<.001$ ) のそれぞれが有意となった。観察者の評価や第三者の評価よりも行為者の推測の方が否定的である傾向が示された。交互作用効果について、自尊心×観察者比較は有意とならなかったが ( $\beta=.13$ ,  $t=1.14$ ,  $ns$ )、自尊心×第三者比較は有意となった ( $\beta=.30$ ,  $t=2.68$ ,  $p<.01$ )。

Table 1 否定的評価に対する階層的重回帰の結果

階層 統計量	第一ステップ			第二ステップ		
	B	$\beta$	t	B	$\beta$	t
定数	44.47	—	46.61***	44.57	—	47.74***
自尊感情	-.03	-.04	.42	-.26	-.27	2.03*
観察者比較	-5.71	-.41	4.24***	-5.81	-.42	4.41***
第三者比較	-7.12	-.53	5.44***	-7.21	-.54	5.64***
自尊感情×観察者比較				.22	.13	1.14
自尊感情×第三者比較				.52	.30	2.68***

註) \*:  $p<.05$ , \*\*:  $p<.01$ , \*\*\*:  $p<.001$ .

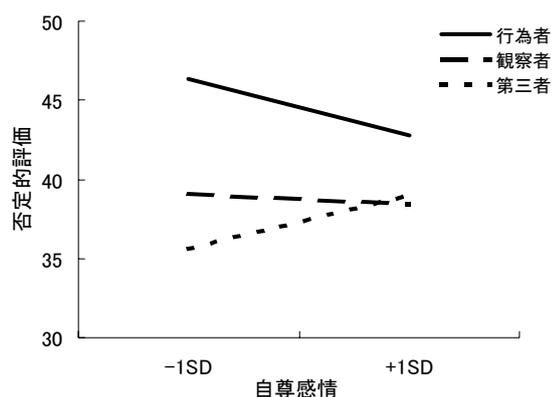


Figure 1 行為者、観察者、第三者別に見た自尊感情が否定的評価に及ぼす影響

交互作用効果を理解しやすくするために、行為者条件、観察者条件、第三者条件における自尊心 ( $x$ ) による否定的評価 ( $y$ ) の非標準化予測式を算出した。行為者条件の予測式は  $\hat{y}=44.58-.26x$  となり、非標準化係数は有意となった ( $t=2.02$ ,  $p<.05$ )。Figure 1 に示すとおり、行為者の推測は自尊心の低下と共に否定的になる傾向にあった。観察者条件の予測式は  $\hat{y}=38.76-.05x$  となり、非標準化係数は有意とならなかった ( $t<1$ ,  $ns$ )。最後に統制条件の予測式は  $\hat{y}=37.36+.25x$  となり、非標準化係数は有意傾向となった ( $t=1.78$ ,  $p<.10$ )。Figure 1 に示すとおり、第三者としての推測は、自尊心の低下と共に肯定的になる傾向にあり、行為者の推測と逆の傾向を示していた。

## 考察

### 否定的評価の過大推測

場面想定法を用いた検討の結果、映画館で携帯電話を鳴らす、ファーストフード店でトレーを落とすといった社会的失態場面において、行為者役は、観察者役による実際の評価や第三者の推測よりも、他者から否定的に評価されると考えていた。このことは、本研究の仮説1を支持し、Savitsky et al. (2001) と一致して否定的評価の過大推測が認められたことを示していた。また、本研究が日本人サンプルを用いたことを考慮すると、このような過大推測は文化差の影響を受けないことが示唆される。否定的評価の過大推測が日常場面における社会的相互作用に果たす役割はまだ明らかではないが、何らかの社会的機能を果たしているのかもしれない。たとえば、周囲からの評価を否

定的に推測することは、集団規範に合致した行動をとるように人を動機づけるかもしれない。このような動機づけは、社会的包摂を促進し、ひいては集団凝集性を促進するように働く可能性がある。そして、推測を過大にすることは、失態によって実際に排除される前に対処する余裕を生じさせることになる。ヒトが集団生活を基盤とする社会的動物であることを考えると、否定的評価の過大推測は適応的機能を果たしているのかもしれない。

もちろん、本研究は場面想定法を用いているがゆえの制限もある。第一に、行為者、観察者、第三者の条件間で想定した場面の細部が異なるかもしれない。このような場合、行為者推測と、観察者、第三者の評定を直接比較することの妥当性が低くなってしまう。第二に、行為者役が実際に失態を犯したわけではない。失態に伴う内的状態の変化は、実際と場面想定時における推測とは異なる可能性がある。たとえば、実際場面では恥や罪悪感のような情動が強く生起する可能性があるが、場面想定時にはきわめて弱く生起、もしくは全く生起しない可能性がある。さらには、否定的評価の過大推測の基底をなす焦点化の錯覚の強度が異なるかもしれない。実際に失態を犯したときには、焦点化の錯覚が強く生じるかもしれないが、場面を想定したときには焦点化の錯覚が弱い、もしくは生じないかもしれない。場面想定による心的シミュレーションが一人称視点で主体的になされていたのなら問題は少ないが、三人称視点である種、客体的になされていたのであれば、状況などの他の要因に目を向けやすくなるかもしれない。これらの点に留意し、今後、基底をなす心理過程を実験室実験で同定する必要があるだろう。

### 特性自尊心による調整効果

本研究の結果は、否定的評価の過大推測が特性自尊心で調整されることを示唆した。統計学的には、自尊心×第三者比較の交互作用効果のみが有意であった。しかし、各視点における回帰式と予測値パターンからは、行為者の推測においてこそ特性自尊心の影響が認められ、観察者や第三者の推測では特性自尊心の影響が見られないもしくは弱いことが示された。特性自尊心が高まるほど、他者評価推測は否定的でなくなった。この結果は仮説2を弱いながらも支持している。高い特性自尊心は社会的失態を犯したときに、否定的評価推

測の緩衝材として働くのである。

しかし、本研究の結果からは、特性自尊心の緩衝機能がどのようにしてもたらされるのか、同定できない。問題でも議論したように、特性自尊心が緩衝機能をもつ理由として否定的感情制御への動機づけがあげられる。特性自尊心が高い者は、低い者と比較して否定的感情を改善しようと動機づけられやすい (Smith & Petty, 1995)。このことが、特性自尊心が高い者で焦点化の錯覚を弱めるように働くかもしれない。しかし、この説明が本研究に適用できるかどうかは不安が残る。本研究は場面想定法を用いており、先述したとおり否定的情動が十分喚起されていない可能性がある。このような場合でも否定的評価の過大推測が起きると考えた場合、感情改善への動機づけが評価推測過程に影響するとは考えにくい。この点については今後の検討が必要だろう。例えば、本研究の個人差要因を特性自尊心からネガティブ・ムード・レギュレーション期待尺度 (Catanzaro & Mearns, 1990; 田中・沼崎, 2008) に変更して検討することもありうる。ネガティブ・ムード・レギュレーション期待感は、否定的感情改善動機づけの規定因と考えられている (Catanzaro & Mearns, 1990)。また、この期待感は特性自尊心と正相関を示すことも分かっている。特性自尊心の緩衝機能を検討する一助になると考えられる。

特性自尊心が緩衝機能をもつ理由のもう一つとして、特性自尊心が他者からの受容に関する情報として働く可能性があげられる。ソシオメータ理論 (Leary & Baumeister, 2000) によれば、特性自尊心は、他者受容の恒常的平均レベルを示す。つまり、高い特性自尊心は、他者から受容されているという感覚とそれに対する確信を与えると考えられる。その結果、他者からの否定的評価を肯定的な方向に修正させたのかもしれない。

もし特性自尊心が推測のための情報として用いられるのであれば、状況が明確な場合よりも曖昧な場合に特性自尊心の緩衝機能が高まるかもしれない。なぜなら、情報価値は、不確実状況でこそ高くなるからである。このような考え方は、拒絶感受性 (rejection sensitivity; Pietrzak, Downey, & Ayduk, 2005) のアイディアにも通じるものである。拒絶感受性とは、拒絶経験に対する不適応反応の生じやすさの個人差を意味しており、拒絶期待の高さに端を発し、否定性知覚

閾値の低下、否定的手がかりの個人化、感情反応の激化をもたらす (Downey & Feldman, 1996)。この個人差は、曖昧な対人場面で脅威感を引き起こすことが分かっているのである (Downey, Mougouis, Ayduk, London, & Shoda, 2004)。本研究の文脈に照らし合わせて考えるのであれば、周囲の反応がある場合と、ない場合とでは特性自尊心の緩衝機能の強さが異なると考えられる。この点に関して今後の検討が必要である。

さらに、本研究は場面想定法を用いて検討していた。場面想定法では状況の具体性に限界があると同時に曖昧さが存在する。そのため、場面をシミュレーションする際に実験参加者の既有知識によって不足な情報が補填されると考えられる。このことを鑑みると、本研究の状況は、否定的評価の過大推測に対する特性自尊心の緩衝機能が働きやすい状況であった可能性がある。実験室実験や現実場面においては、状況が明確となり、特性自尊心が影響しなくなることも考えられる。事実、社会的排除に関する実験室実験において、特性自尊心の緩衝効果がみられない場合が存在する (e. g., Williams, Cheung, & Choi, 2000)。この点についても今後の検討が必要である。

## 註

- 1) 本研究は、日本社会心理学会第45回大会で発表されたものを再分析したものである。

## 引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. London: Sage.
- Baldwin, M. W., & Sinclair, L. (1996). Self-esteem and "If...Then" contingencies of interpersonal acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 1130-1141.
- Catanzaro, S. J., & Mearns, J. (1990). Measuring generalized expectancies for negative mood regulation: Initial scale development and implications. *Journal of Personality Assessment*, *54*, 546-563.
- Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate

- relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.
- Downey, G., Mougouis, V., Ayduk, O., London, B., & Shoda, Y. (2004). Rejection sensitivity and the defensive motivational system: Insights from the startle response to rejection cues. *Psychological Science*, **15**, 668-673.
- Gilbert, D. T., & Wilson, T. D. (2000). Miswanting: Some problems in the forecasting of future affective states. In J. P. Forgas (Ed.), *Feeling and Thinking: The role of affect in social cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.178-197.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 32. San Diego: Academic Press. pp.1-62.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- Pietrzak, J., Downey, G., & Ayduk, O. (2005). Rejection sensitivity as an interpersonal vulnerability. In M. W. Baldwin (Ed.) *Interpersonal Cognition*. New York: Guilford Press. pp.62-84.
- Savitsky, K., Epley, N., & Gilovich, T. (2001). Do others judge us as harshly we think? Overestimating the impact of our failures, shortcomings, and mishaps. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 44-56.
- Smith, S. M. & Petty, R. E. (1995). Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1092-1107.
- 田中知恵・沼崎誠 (2008). ネガティブ・ムード制御方略に対する期待感の効果 心理学研究, **79**, 107-115.
- Williams, K., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 748-762.

## 付録 1 : 実験で用いた場面刺激

## 場面 1 : 映画館

**行為者条件** あなたは映画を見に出かけました。この映画は、世界恐慌下の米国で、庶民に希望を与え続けた競走馬と 3 人の男たちを描いた感動実話で、誰もが泣けると評判の話題作です。うわさどおり、上映開始早々から感動シーン続いており、観客はすっかり見入っていて、静けさすら漂っています。その瞬間、あなたの携帯電話がけたたましくなり響きました。

**観察者条件・第三者条件** あなたは映画を見に出かけました。この映画は、世界恐慌下の米国で、庶民に希望を与え続けた競走馬と 3 人の男たちを描いた感動実話で、誰もが泣けると評判の話題作です。うわさどおり、上映開始早々から感動シーン続いており、観客はすっかり見入っていて、静けさすら漂っています。その瞬間、後ろの観客の携帯電話がけたたましくなり響きました。

## 場面 2 : ファースト・フード店

**行為者条件** あなたは、とあるファースト・フード店で、お茶とケーキを食べていました。このお店は、店内で食べるときは、陶器製の食器で出してくれます。お茶はマグカップに入れられていますし、スイーツはお皿に載せられています。あなたは、待ち合わせの時間が近づいたのに気づき、店を出ることにしました。トレーにそれぞれの食器を載せ、片手に自分の荷物を、もう一方にはトレーをもって立ち上がりました。そのとき、あなたの荷物がテーブルにぶつかり、その勢いでトレーを落としてしまいました。

**観察者条件・第三者条件** あなたは、とあるファースト・フード店で、お茶とケーキを食べていました。あなたの前方の客も同じメニューのようです。このお店は、店内で食べるときは、陶器製の食器で出してくれます。お茶はマグカップに入れられていますし、スイーツはお皿に載せられています。あなたの前方の客は、店を出ることにしたようです。トレーにそれぞれの食器を載せ、片手に自分の荷物を、もう一方にはトレーをもって立ち上がりました。そのとき、その人物の荷物がテーブルにぶつかり、その勢いで、その人はトレーを落としてしまいました。

註) 下線部は条件間で異なる部分を示している。